

〈書評〉

竹内道雄 著

『道元』を読んで

伊東洋一

竹内道雄著『道元』(日本正史学会編集、人物叢書88、吉川弘文館発行)を讀して、正法眼藏を一箇の哲學書と見その思想の論理的展開に専ら関心を向けてきた、つまり著者の分類にしたがえば

「思想内容の哲學的研究」を中心とする立場に属する私にはまことに教えられるもの、感じさせられるものも多かった。それでその点について少しく感想を述べて、求められた書評にかえたい。

此の書は一、おいたち二、入宋までの修業時代三、在宋修業時代四、歸朝後の興聖寺時代五、北越入山から入滅までの五つの時期に分け、それをそれぞれ無常觀、求法の志、身心脱落、弘法救生、一箇半箇の獲得として捉え、以て道元の人物伝を完成しようとしている。そしてそれを讀く着者の趣圖は、「はしかき」によれば、道元という人物の行実と宗教思想をその時代的、社会的背景のなかにとらえてこれを現在に生かすことであつたという。私が此の書にとりわけ親近性を感じた興味を覚えたのは実にこの点である。しかし着者もことわつてゐる通り、このような趣圖の実行実現には多くの困難が避けられない。一口に思想と行実、又それと時代、社会との關係といつても、問題は簡単でない。又宗教思想家の人物伝ということになると、史実に従う客観性と或はそれにも

まして着者の宗教という世界に自己を投入する主体性をも必要とするであらう。この点に關しても着者の並々なぬ見識と態度、姿勢をうかがえたのも「はしかき」五頁一、私にとって身近いもの、思ふをさそうものであつた。もとよりこのような趣圖、姿勢が人物伝「道元」を完全に成功させたかどうかの評価は私のよくなしうるところではないが、道元の行実とその中心思想が時代、社会の背景から浮き彫りされていく経過は、少くとも私のような者には教えられるところが多かつたのである。尤もこのような方法は歴史學にあつては當然なこともかも知れないが、史料の取り扱いは公平で、そこから徒な強弁や断定的結論を性急に導かず、考慮さるべき史料を並べて問題を残すというやり方は史學研究の良心を教えられるて、何よりも好感を覚えたのである。

次に今述べてきたような例を着者の中から项目的に拾つてみると、柴西道元相見の問題新刊有列位に關する是正運動、深草田居の理由、興聖寺開創の問題、東福への教線拡張、鎌倉下向、時頼へ

すずめた太政奉還、時頼の寺領寄進、紫位下賜等又王法國法一如觀、本証妙修修証一如、在家成仏からその否定と絶一な出家主義の唱道、只管打坐、山居隱想、誦法と行持等々、殆ど著者全篇にわたっているといつてよい。

しかし反面そのような史実に立脚する客観的叙述は往々無味に陥る危險もない訳ではない。私自身発心の動機に母の死を擧げているのに全然同感を増えるものだが、それだけに史料的に許せるものならもう少しそれを強調できなかったかという慥必をもつ。殊に『道元』伝の才一期おいたちが無常觀にあるのであるから。しかし又著者の史家としての姿勢が内に秘めた道元への私淑をカバーし、比重において上回っていることを知れば、例へば道元の出生の執拗と思われるほどの穿さくも決して單なる暴露記事ということにはならないのであらう。出生の穿さくといへば、私にはこの冒頭の叙述がすこぶる『道元』を意味するものにしたように思ふのである。すなわち史料に基づいた客観的叙述に無味な物足らぬものを感じた私であ

つたが、そのような叙述が後半に達して「護國正法義」の奏聞に端を発して興聖寺を捨て北越に入山する箇所、又鎌倉行化、更に入寂に當つての上格に融れると、そこに人間道元を強く感じ、又種々の臆測さえ逞しくさせられたのである。

私は道元の生涯を考える時、唐突ではあるが、ギリシヤの哲人プラトンを思い起すことが屢々である。いずれも、貴族の出生であるが花々しい政界への進出を断念して求道にその生涯を費した人達である。しかしプラトンに於つてはその哲人政治や理想国家という形で、現実政治への関心を去ることがなかったと見られる。そうであれば同じことが道元にも全然見られないであらうか。道元の俗系は終始政界の中心勢力ではなかった。したがつて道元は世間の無常を人一位感じていただろうことは確かである。しかし政治への位置は、その出身と俗系を考慮する限り、最下層にあつた。欲する限り政治への発言も不可能ではない。後半の客観的叙述は私にこのような臆測をさせ、道元の意識下に渦巻く聖と俗の対立に不気味なものがす

ら読みとらせるのであつた。實際此の書の着者は最初の道元のおいた方の箇所で、「このような村上源氏父祖正代の伝統的資質を道元は多分に継承して誕生したと思われる。後年の道元の宗教活動にはこうした俗系の伝統的な血がなにかしら強く影響しているように思えてならない」と述べて、私を先ず誘っているからである。村上源氏の伝統的精神とは学問文筆の才の他に、この場合政治的なものである。

私は感想ということで勝手に脱を敢てしてしまつたようである。私の云いたかったことは、思想が時代社会と大いに関係あることを認識しながらも、道元を見る場合いわば眼蓋の論理に振り回れられその思想を思想だけから追ひ求めていたのに対し、中心思想の教々をその背景たる時代、社会から史学的に解明を試みてみせてくれたことに對する労と、そこから道元の真正な把握は史学的立場はもとよりその他各方面がらの研究の立場の共同に今後一層俟たねばならぬということである。